

---

---

# 序

## テキスト布置の解釈学とは何か



### 1. テキスト布置の解釈学の素描

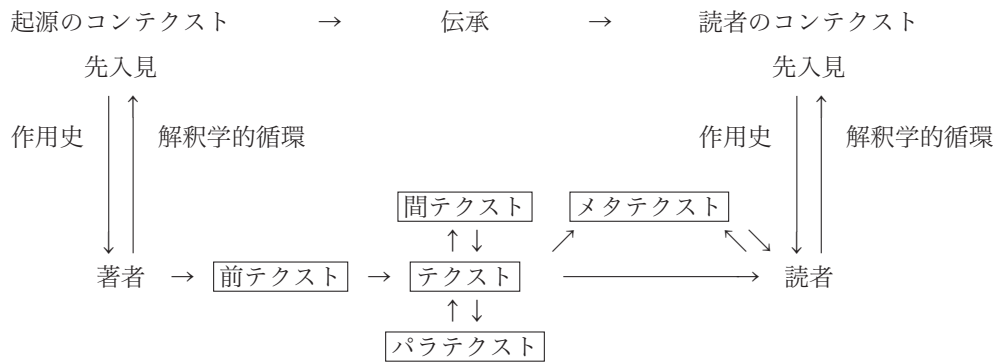
シンポジウムの組織責任者として、私が考えている〈テキスト布置の解釈学〉の概観を述べておきたいと思います。こうした企図は解釈学および解釈学的なテキスト観と関わりがあることは言うまでもありません。解釈学は、久しい間、解釈の技法として見なされ、古典文献学、聖書釈義、法解釈学という三つの領域で実践されてきました。19世紀の間に解釈学は明確に哲学的な次元を獲得しました。『存在と時間』においてハイデッガーは解釈を世界内存在の様態として考察し、そのことによって解釈学の存在論的転回を示すことになりましたが、解釈学のこの存在論化は、シュライエルマッハーやデイルタイが示していた技法的、認識論的な関心が薄らぐ結果をもたらした側面もあります。以後解釈学をめぐる議論は哲学内部でもっぱら行われるようになり、テキストをめぐる問題群はほとんど取り上げられることはなかったと言えるでしょう。1960年に刊行されたガダマーの『真理と方法』は、テキストの解釈を解釈学的経験の場として捉え、人文学にとってのその重要性を、猖獗を極める方法論主義に抗して強調しました。この著作は、その思弁的性格にもかかわらず、またその性格のゆえに、人文学固有の認識様式の根源にある解釈学的経験が、歴史的作用〔作用史〕のなかにあり、それを蒙っていることを浮き彫りにすることができたのです。

哲学的解釈学の傍らで、テキストへの多様な興味深いアプローチが認められますが、なかでもそうした試みの一つに1960年代、1970年代にかけてフランスで展開されたテキスト論があります。ロラン・バルト、ジェラルド・ジュネット、ジュリア・クリステヴァ等によって代表されるこの前衛的な流れが対象としたのは、文学や哲学のテキストであり、テキストを自立していて主体から独立したものと見なそうとする傾向があります。解釈学は大抵の場合、敵視されています。その理由は、解釈学はテキストを意味へ還元すると見なされているからです。この二つの流れは、外見上は互いに独立しており、相互に相手を誤認していたのです。ドイツの受容学派の文学的解釈学の試みにも関わらず、哲学的解釈学とテキストの批評理論の諸成果を一つに結びつけて、人文学に解釈学的学問の地位を再興する課題が私たちに残されています。「哲学的解釈学からテキスト解釈学へ」というタイトルを選ぶことで私どもが示したかったことは、人文学と法テキストの解釈にとっての解釈学の争点と射程だったのです。

テキストの伝統的な定義によれば、テキストとは、少なくともこの名称に値するものは、註釈の対象となるものすべてです。文学作品がどのようにその孤立において輝かしいものであれ、この定義は、テキストが読まれ註釈されるに値することを前提としています。テキストとは、文化的対象であり、ある共同体がある種の価値をそれに認知しているものです。テキストは、どれほどその孤立において輝かしいものであっても、それだけで、それ自身において、またそれ自身のために存在しているわけではありません。あるテキストを読解の対象として選ぶことは、暗黙裡に価値判断に依拠しています。テキストは、それをかかものとして存在せしめる読者のおかげではじめて存在するのです。テキストと読者の錯綜とした関係は、テキストが自律した存在であるという考えを問いに付します。テキストは歴史のない孤島ではけっしてありません。「不

「分明な災厄から今ここに失墜した静謐な塊」(マラルメ「アラン・ポーの墓」)ではないのです。テキストはみずからの裡に、その生産や受容を司った社会的歴史的諸条件のマークを宿しています。

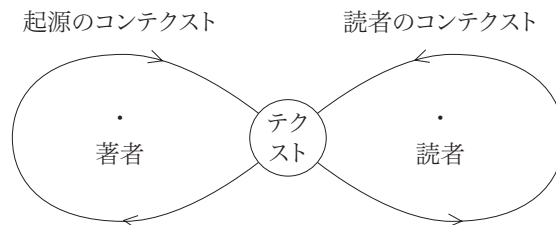
ヤコブソンの有名なコミュニケーションの図式が思わせるように、テキストはコミュニケーションの単なる手段ではありません。テキストはそれ固有の動的な複雑性のなかで書かれ読まれるのです。歴史的・文化的なマークの分析によって、テキストを構成し超越するテキスト布置が浮上してきます。G・ジュネットが「超テキスト性」と呼ぶものについての彼の研究から着想を得て、前テキスト、起源と読者のコンテキスト、解釈学的循環等々の一連の概念を組み込み、さらに作者と読者の概念を加えてテキストにその動的な複雑さを復元しようと努めたのです。註釈の対象として、テキストはそれを織り上げる間テキスト的操作に媒介された結果であるが、前テキストがその物質的痕跡を持っているところの生成的操作に媒介された結果でもあります。さらに、テキストは、それが帰属するジャンルを指し示すパラテキストを、どのような形であれ持っています。しかしテキストのいかなる類型も、それ自体で実定的に存在する自律的な実在体 *entité* ではなく、それをかかものとして機能せしめる複雑な諸関係の総体なのです。ある連なりの言表は、このテキスト布置においてどのような位置を占めるかに応じて、同じ意味や機能を持つわけではないのです。テキストを眼前に読解の対象として持つや否や、テキスト布置は始動し、私たちをメタテキストを生むことの可能な読者として含むことになります。書くことと読むことは、作者にとって、読者にとつと同様に、喜びをもたらす行為であるばかりではなく、解釈学的経験なのです。この経験を通して最初の執筆の企図やテキストの意味の先取りは進むにつれて吟味され訂正されていくのです。これはまさしく「解釈学的循環」と呼ばれているものです。書くことと読むことは、歴史の及ばず働き(作用史)を蒙っている活動でもあります。そしてテキストが読者の手元に届くためには、伝承の歴史が常に存在しています。このテキスト布置を次のように図示することができますでしょう。



テキストは註釈(メタテキスト)の対象であると同時に生産する操作(前テキストはその物質的な痕跡をもっています)や間テキスト的な操作(これはテキストを絶えず引用的に織り上げています)によって媒介された効果(結果)なのです。さらにテキストは、テキストが所属しているジャンルを示すパラテキストを、どのような形式であれ、持っています。しかしながらこうしたテキストの種類のどれも、それ自体で実定的に存在する自律した存在のように考察されるべきではありません。テキストは、こうしたテキスト類型を機能させる複合的な諸関係の総体に媒介された効果なのです。したがって、ある一続きの言表は、それがこの布置のなかでどのような位置を占めるかに応じて、その意味や機能は変わってきます。そしてわれわれが眼前にテキストを読解の対象として持つと、直ちにテキスト布置が作動し、われわれもメタテキストを生み出す読者としてこの布置の中に包摂されてしまうのです。

## 2. 対話としてのテキストの根源的二重性

ありうべき誤解を避けるために、次のことを述べておきます。すなわち、解釈学的循環はある同じ主体の内部でのナルシシク運動ではなく、テキストの還元不可能な他者性に触発されて生気づけられているということです。若干の単純化を取れば、解釈の二つの方向を大別できます。一方では、実証主義的と形容できる解釈は、科学的客観性の名の下に、テキストのオリジナルな意味とコンテキストを特権化して、みずからの条件を考察しようとはしない傾向にあります。文学研究における伝統的な文学史や作家研究、歴史における歴史主義がこうした実証主義のパラダイムに属しています。しかし、既に指摘したように、いかなる読者もテキストの意味を先取りしないではテキストにアプローチできません。テキストの解釈は読者—研究者の文化的コンテキストから逃れることはできないのです。いかなる研究も、問題が設定され、研究対象が構築されるある決定された状況から出発してなされるからです。そこから主体が研究対象の中に含まれてしまうという問題が生じてきます。テキストを自分の現在の関心から検討することができます。読者はそこでテキストを自分の世界に引きつけて、そこに自分の価値や判断を投影します。これは現在化的読解で、脱構築的な読解とそれほど隔たってはいません。しかしながら、語の選択やその配列は読者の恣意ではどうにもならず、読者による還元的な自己固有化に抵抗します。ガダマー以降の解釈学はテキストの還元不可能な二重性を強調しています。すなわち、テキストがオリジナルなコンテキストと受容のコンテキストの双方に所属するというこの二重性が、テキストをして絶えず更新される対話の場たらしめているのです。著者との対話は、つねにテキストによって媒介されていて、このテキストこそが対話を、あるいは対話の幻想を根拠づけていることを、ここで注記しておくのが適切でしょう。言い換えれば、著者の形象は読者によって、テキストから出発して帰納的に引き出されてくるのです。われわれは読解の二つの極の間で均衡を保つことになったのです。テキストのこの二重性を以下のように図示できるでしょう。



読解の動きは二つの点、ここでは著者の極と読者の極の名づけたものの周りを回ります。両極の各々は、読解に対して牽引力と反発力を及ぼします。テキストは二つの円環の柔軟な結び目を表しています。実証主義的読解は著者の極に向かい、テキストが生み出されたオリジナルなコンテキストを還元しようと試みます。しかしながら、ある時点でそれは著者の極に到着することなく、反転し遠ざかります。それは読者の極というもう一つの極からの牽引力によるのです。そこで読解が反対の方向へ進み、すなわち読者の極に向かい、著者の極の牽引力によって反転することを余儀なくされるまで接近してゆきます。

以上が解釈の行程が実現する二重の循環する運動です。テキストが解釈に与える力は解釈が失う力でもあるのです。各々の解釈は他方の解釈によって、その堅固さを奪われていることとなります。実証主義的解釈と脱構築的解釈は同じメダルの裏表でしかないわけです。二つの極を結びつけると同様に相互に対立させもするテキストは二つの運動が特に錯綜した仕方で結びつく、ありうべからざる場を拓くのです。テキストはオリジナルなコンテキストにも読者のコンテキストにも属してはいませんが、双方に同時に関わっているのです。こうしたテキストの根源的二重性は、同一律、矛盾律、排中律を越えるものです。形式論理の用語では考えることのできないこの二重性は、われわれによって、異質だが身近でもある経験として、神秘的であ

のと同様に平凡な事実として、生きられているのです。

\* \* \*

この論集に収録された論文は、2011年12月9日から11日にかけて、名古屋大学で開催されたグローバルCOEプログラムによる国際シンポジウムの口頭発表を基に執筆されたものです。本報告書は三部構成です。第一部は哲学的解釈学に関する論文、第二部は19世紀のフランスの作家、バルザック、ミシュレ、バルベール・ドールヴィイに関連した三編の論文です。第三部は法学におけるテキスト解釈に割かれています。

最後に、私どもの招きに応じて大学に足を運んでくださったすべての参加者にお礼を申し上げたいと思います。特に三人の講演者には、解釈学的なテキスト経験を正面から取り上げ、その対話的構造を明確にされたモントリオール大学教授のジャン・グロンダン氏、バルベール・ドールヴィイというアンチモダンの作家の物語の解釈学的読解を模範的に提示して下さったパリ第4ソルボンヌ大学教授のピエール・グロード氏には、太平洋を横断されて研究成果を私どもと分かち合ってくださいましたことを特に感謝したいと思います。また東北大学教授で元日本哲学会会長の野家啓一氏は、2011年3月11日に被災されたにもかかわらず、名古屋大学に足を運んでいただき、科学哲学における解釈学の普遍性を証していただきました。三人の講演者には特に深く感謝したいと思います。またシンポジウムに研究発表によって参加して下さった南カルフォルニア大学のアンドレ・マルマー教授、東京大学の長谷部恭男教授、同志社大学の濱真一郎教授、立教大学の佐々木一也教授、信州大学の鎌田隆行准教授、南山大学の真野倫平准教授にもお礼を申し上げます。

最後に、シンポジウムの準備と本報告書刊行のために全面的に協力していただいた同僚の森際康友教授とクレール・フォヴェルグ特任准教授に、深く感謝したいと思います。

グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」研究担当サブリーダー  
名古屋大学大学院文学研究科教授 松澤和宏